

ロンゴワルシトのジャワ神統記『パラマヨガ』(その2)

Pujangga Ranggawarsita's *Serat Paramayoga* (2)

豊田和規 Kazunori TOYODA 訳

新島学園高等学校 Niijima Gakuen Senior High School

訳者まえがき

本稿では、前回に引き続き、ジャワの宮廷詩人ロンゴワルシト(Ranggawarsita, 1802—1873)の『スラット・パラマヨガ』(*Serat Paramayoga*) [以下では『パラマヨガ』と略記する]の全訳を試み、同書を紹介する。本稿は前回の「ロンゴワルシトのジャワ神統記『パラマヨガ』(その1)」を引き継ぐものであり、本稿の翻訳者の構想する『パラマヨガ』の全訳は3部構成であり、今回の全訳は第2部にあたり、(その2)と表記する。

ロンゴワルシトはジャワのスラカルタ王国で活躍した大文学者であり、『パラマヨガ』は、彼の代表作である長編の神話的王朝年代記『プスタカ・ラジャ』(*Pustaka Raja*, 王の書)の序論にあたる。『パラマヨガ』は散文形式であり、ジャワ文字によって近代ジャワ語で書き記されている。「パラマヨガ」の語源は古代ジャワ語に由来する。「パラマ」(parama)とは、「最高の」を、「ヨガ」(yoga)とは「瞑想」を意味する。すなわち「パラマヨガ」とは「最高の瞑想」(エクスタシー)を意味する。

前回においても記したように、『パラマヨガ』の写本はスラカルタ王宮ササナ・プスタカ図書館とマンクナガラ王宮レクサ・プスタカ図書館にそれぞれ1点ずつ所蔵されている。同書は19世紀中葉にロンゴワルシトによって執筆された[Florida 1993:160; 2000:213]。1906年に初めてジョグジャカルタのフォールヘン・ブニン株式会社(NV. Voorhen H. Boening)によって出版された。その後しばらくして、ジャワ文学の大碩学カマジャヤ(Kamajaya, 1915—2003)によってローマ字化されて、ジョグジャカルタのチュンティニ協会(Yayasan Centhini)から出版された[Kamajaya 1977]。この刊本は、2001年にオット・スカトノ(Otto Sukatno Cr.)によってインドネシア語に翻訳され、ジョグジャカルタのベンタン・ブダヤ協会(Yayasan Bentang Budaya)から



出版された[Otto Sukatno Cr. 2001]。同書はフォールヘン・ブニン社のテキストにも充分配慮しつつ、翻訳を試みている。

本稿では、前回と同じくオット・スカトノのインドネシア語版テキストをもとにしながらも、不明瞭な部分についてはカマジャヤによるジャワ語テキストを随時照合して、日本語による全訳を試みた。『パラマヨガ』全体の構成は以下の通りである。

序言

1. 預言者アダム
2. 預言者シス
3. シャイド・アンワル別名サン・ヒヤン・ヌルチャヒヤの生涯
4. サン・ヒヤン・ヌラサの遍歴物語
5. サン・ヒヤン・ウナンの遍歴物語
6. サン・ヒヤン・トゥンガルの遍歴物語
7. サン・ヒヤン・グルがアジアの国を滅ぼす
 - (1) アンディニ牛
 - (2) ラタ・ワル・グジュヤ
 - (3) ティルバー魚 — バタリ・ウマ
8. 神々の系譜が次第に発展し広がっていく
9. ペルシャの西側の人々の信仰
10. ジャカ・スンカラ別名アジサカの誕生と遍歴
11. サン・ヒヤン・ジャガドナタが預言者イサと敵対する
12. サン・ヒヤン・ジャガドナタがジャワ島から移動する

今回は、前回に引き続き、『パラマヨガ』の第7章「サン・ヒヤン・グルがアジアの国を滅ぼす」の(3)「ティルバー魚—バタリ・ウマ」から第10章「ジャカ・スンカラ別名アジサカの誕生と遍歴」までを紹介する。人名や地名などの固有名詞のローマ字綴りについては、カマジャヤのジャワ語テキストの綴り字に統一した。[]内はオット・スカトノによる注記および訳注をもとにしたものであり、()内は本稿の翻訳者による注記である。

『パラマヨガ』全訳(その2)

(3) ティルバー魚—バタリ・ウマ

人間の内なる秩序について非常に賢明であり、精通していたサン・ヒヤン・マニッ

クマヤは、ペルシャ国およびその周辺の人々がアフガニスタン王国領の沼にいる大きな魚を偶像視していることは、はっきり理解することができた。供物を捧げた後、サン・ヒヤン・マニックマヤはそのままその魚の王に近づいた。その魚が浮かんでいるのが見えた。非常に大きく、魅惑的であり、あらゆる点で恐ろしかった。動けばその魚の光は太陽の光のようだった。サン・ヒヤン・マニックマヤはすでにはっきり理解していたとはいえ、身を隠して、その魚のことをわかっていないように振舞った。彼は言った。「おい、お前は何の魚だ。魅惑的であり、本物の魚のようには見えないが。そしてお前の鱗は光を発散しているではないか？」

サン・ヒヤン・マニックマヤの言葉を聞いて、ティルバー魚は非常に驚いた。そのように尋ねた人間はこれまでにいなかったからである。

「おい、礼儀の仕方を知らない者よ！」とティルバー魚は答えた。「なぜお前は不敵にも私を卑しめるのだ。お前は、この私が世界の主であることを知らないのか！」

そのような答えを聞いて、サン・ヒヤン・マニックマヤは微笑んで、次のように言った「おい、図体の大きすぎる魚よ。どうやらお前は、主であると名乗りを上げているようだ。私以外に神の存在などないのだ！」

その時、彼らは口論し、共に自らが神であると名乗りを上げた。サン・ヒヤン・マニックマヤは相手の神霊力を打ち負かす神秘的な呪文を唱えた。その時、突然、沼は煮え立ち、波がものすごく荒れ狂った。沼の温度は煮え立っている水の温度を超えた。ティルバー魚は茫然とし、身を動かすことができなかった。彼女は彼の神霊力に敗れたと思った。そして彼女は言った。「おお、主よ、今後は、私は、あなたこそ全世界の主であると見なします。しかし、もしそれが本当であるならば、私の魂を引き裂いたあなたは、私の出自を知っていますか？」

「おい、魚よ！」とサン・ヒヤン・マニックマヤは答えた。「お前は本当はウマイ(Umayi)という名の女性であった。サブリスタン(Sablistan)国⁽¹⁾出身のウマラン(Umaran)という名の船長の娘であった。お前は修行することを願って、王国を離れた。お前は全世界の主の妻になることを望んだ。けれどもお前が歩んだ道は間違っており、前のめりになり、体は砕かれ、魚になってしまったのだ！」

そのようなサン・ヒヤン・マニックマヤの言葉を聞いて、彼女の心はますます恐れおののいた。そして彼女は言った。「おお、非常に力のある主よ。あなたが私を赦し、私にご慈悲を垂れてくれますように。私は完全に癒されて、人間に戻りたいのです！」

「おい、魚よ。お前は本当は人間なので、やがて人間の姿に戻るだろう。けれども今はまだその時ではない。しばらくの間、お前はここに留まるのだ！」とサン・ヒヤン・マニックマヤは答えた。

ティルバー魚はサン・ヒヤン・マニックマヤの願い通りのことを行い、彼を礼拝し続けることにした。それ以降、沼のあらゆる水棲動物は直ちに共にサン・ヒヤン・マニックマヤを礼拝した。その時からサン・ヒヤン・マニックマヤはサン・ヒヤン・ウティパティ(Sang Hyang Utipati)と称した。それはあらゆる水棲動物の神という意味である。そして彼は天界に戻った。

天界に到着すると、サン・ヒヤン・マニックマヤはペルシャ国の人々がどうしたらあの魚を礼拝するのをやめて、彼を礼拝するようになるだろうかといつも考えていた。ある時、サン・ヒヤン・マニックマヤは相手をだます神秘的な術をかける戦術を立てた。突然、あの魚を礼拝していたペルシャ国の人々すべてが非常に恐ろしい不幸や病気の災難に見舞われることになった。朝、病気になると、夕方には亡くなる。その反対もあった。サン・プラブ・ジルダスタ(Sang Prabu Jirdasta)も病気に罹った。彼のすべての民も軍隊も同様であった。ペルシャ国の人々はどうしたら逃れる場所を見つけられるだろうかと途方に暮れた。ペルシャの西側にいた人々は、ユダヤのヘブライ王国およびブルサー(Brusah)国(やがて後日、ヨーロッパ人によってアジア・トルコ国と呼ばれる)に群れをなして逃れた。一方、カシミール、アフガニスタン、ビルジスタンの人々の多くはインド国に逃れた。

ところでインド国に逃れた人々は平和を望むならば、サン・ヒヤン・マニックマヤを礼拝しなければならないとインドの人々に教えられた。彼こそ本当の神だからである。彼の命令に従う人々は平穏無事であった。一方、彼の命令に従わない人々は死んだ。その時から、カシミール、アフガニスタンおよびビルジスタンの多くの人々はサン・ヒヤン・マニックマヤを礼拝した。その噂が広まり、サン・プラブ・ジルダスタの耳にも届いた。しかし王は配下の司令官たちにもたらされた知らせに従おうとはしなかった。遂に彼も身まかった。ダスタンダル(Dastandar)という名のペルシャの皇太子は、配下の司令官たちによってもたらされた知らせに従い、彼は平穏無事であった。その後、彼はペルシャ国の大王位を継承した。ダスタンダル大王はカシミール、ビルジスタンおよびアフガニスタンの王やティルバー魚を礼拝するすべての人々に、命令を發し、サン・ヒヤン・マニックマヤを神として礼拝するように命じた。彼らは

その命令を実行したので、病気の災厄はすぐに消えた。

疫病が収まった後、ダスタンダル大王は不安で、憂鬱であった。彼は災厄を収める者としてのサン・ヒヤン・マニックマヤは本当は誰であり、どこにいるのか知るまでにはいつも不安であった。王国の司令官たちから聞く以外に彼のことはわからなかった。

ダスタンダル大王は身を隠して、一人の従者も付けずにひとりで王国から離れてティルバー魚が住んでいる沼に向かった。旅行中に彼は、友もなくひとりで歩いてくる者に出会った。尋ねると、彼はウマランという名を名乗った。彼はサブリスタンの大商人であった。彼は王と同じ目的を持っていた。彼の心はサン・ヒヤン・マニックマヤに対していつも不安で心配だったからである。彼はティルバー魚という名の古い神に尋ねたかった。王は喜び、彼らは二人で一緒に出発した。沼の端にたどり着くと、彼らは二人で祈った。しかし彼らは長く祈れども魚の神はすぐには姿を現さなかった。

伝えられるところによれば、サン・ヒヤン・マニックマヤは実に思慮恵深く、知恵、知識に富んでいた。彼はペルシャの大王と商人ウマランの意図するところを理解していた。彼らはいまだに恐れ、ティルバー魚に尋ねてみたかった。それはサン・ヒヤン・マニックマヤの意図するところでもあったので、彼もティルバー魚のいる沼に天から降りてきた。彼はアンディニ牛に乗って、どこからともなく、突然、ダスタンダル大王の前にやって来た。サン・ヒヤン・マニックマヤは光に包まれていた。その光は輝きを放っていた。ダスタンダル大王と商人ウマランは彼の威光のゆえに火をつけられたように感じ、たちまち茫然自失してしまったかのようであった。

「おい、ペルシャ人たちの王と商人よ！」とサン・ヒヤン・マニックマヤは言った。「お前たちは彫像のようにおとなしくなってはだめだ。お前たちの神が本当はどこにいるのか、すぐにわかるだろう。魚を神として奉ってはならない。魚を礼拝し続けるならば、お前たちは死んで魚の姿になるだろう。おい、この沼の真ん中にあるものを見るのだ。何が見えるかな？」

ダスタンダル王は茫然自失したまま、しゃべることができなかった。商人ウマランも同様であった。彼らは沼の真ん中にあるものを目の当たりにすることができた。すでに死んでしまったジルダスタ王とその軍隊すべてがそこにはっきりと見て取ることができた。腹の一部つまりちょうど臍のあたりから上まで普通の人間の姿をしていたが、一方、臍から下までは魚の姿をしていた。ダスタンダル大王と商人はその有様を見て、非常に悲しくなった。

「おい、誤解している者たちよ！」とサン・ヒヤン・マニックマヤは言った。「よいか、お前たちは私の威力を理解するのだ。しかしたとえ本当に私が全世界を支配しているとしても、お前たちは心を動かしてはならない。私は災厄を作り出したり、消し去ることができるのだ」

そのような言葉を聞いた後、ダスタンダル大王と商人ウマランは彼こそが本当の「名前」(サン・ヒヤン・マニックマヤ)を持っている者であることを確信した。彼こそがあらゆる災厄および疫病を消し去ることができるのだ。二人ともサン・ヒヤン・マニックマヤの名前を唱えながら跪き、次のように語った。「おお、至高の神よ、全人類の神よ。私たちは本当に信じ、あなたこそがこの私たちの肉体を包み支配なされるお方であることを本当に確信しています。しかしあなたの威力の証を見せていただけませんか？」

サン・ヒヤン・マニックマヤは商人に次のように言った。「おい、ウマランよ。本当はお前はバゲンダ・サレ(Bagendha Saleh)[預言者スホレ]^②の子孫である。以前お前はウマイという名の娘を持っていた。ある時、彼女は王国を離れ、今までお前は、彼女がどこにいるのかわからなかった。けれども私の慈悲によりお前はお前の娘と会えるだろう！」そのように語った後、サン・ヒヤン・マニックマヤは、普通の人間に戻ることができるように、すぐにティルバー魚を呼び寄せた。その時、突然、ティルバー魚は沼から飛び跳ねて、サン・ヒヤン・マニックマヤに直面した。まもなく、呪いから解放されて、デウィ・ウマイの姿に戻った。

そしてサン・ヒヤン・マニックマヤは商人に尋ねた。「おい、ウマラン。お前の子がウマイであることは本当なのか？」

自分の子を見て、ウマランは非常に愛しく思った。彼は、随分昔にいなくなってしまった子供に会えるだろうとは一度も思わなかった。同時に彼も自分の子呼び叫んで、抱きしめ、涙を流した。「おお、愛しい子よ。私はわが子に会えるだろうとは思ってもみなかった！ この私の目は間違っていないだろうか？ お前は本当にわが子ウマイなのだろうか？」 かなり長い間、商人は愛情の涙を激しく注ぎだした。それは愛情の証として愛と喜びを証明するものであった。長い間会っていなかったからであった。

気持ちが落ち着くと、商人はサン・ヒヤン・マニックマヤに言った。「全世界を支配する主よ。これはウマイという名のわが子に間違いありません！」

「おい。ペルシャの人々を支配する我が創造物である王とウマランよ！」とサン・

ヒヤン・マニックマヤは言って、続けた。「皆の者に知らせるのだ。お前たちが以前、礼拝した大きな魚は本当はウマイが変身した姿なのだ。というのも彼女は、王国から出て行き、修行し、遂には道を踏み外し、魚に変身してしまったのだ。今やお前たちは忠実に我が大能を確信するか？」

ダスタンダル大王と商人は何度も跪き礼拝し、語った。「おお、まことに崇高な神よ。成長するあらゆるものの神よ。私たちはもはや疑いません。本当にあなたは力あるお方であり、全世界を包み込んでおります！」

「おい、我が僕ウマランよ」とサン・ヒヤン・マニックマヤは商人に言った。「お前にはさらにもう二人の娘がいるのは本当か？」

「主よ、本当です。私にはウマイのほかに二人の娘がいます！ 年上のほうはガマリ(Ngamari)という名で、トゥルカン(Turkan)という名の、私の甥と結婚させました。一方、下の子、ウマイの妹は末娘であり、ウマニ(Umani)と名付けました。まだ処女です！」とウマランは答えた。

「おい、ウマランよ！」とサン・ヒヤン・マニックマヤは言った。「ウマニという名のお前の娘はすべての人間の女王にするがよい。お前の娘ウマイはすべての人間によって崇拝される者とするがよい。彼女は非常にしっかりと修行に打ち込んだといわれる。彼女の目的は世界の主の妻になることであった。お前の娘ウマイの考えははっきりしている。実際に私は慰める者であり、慈しむ者である。考えの実にしっかりとしている我が創造物ならだれでも私は認める。お前の娘が目的にしてきたものを、私は認めなければならないのだ！」

商人ウマランはその件についてサン・ヒヤン・マニックマヤが望んでいるものを理解した。彼はただ跪いて、マニックマヤが望んでいるものを手渡した。彼は何度も感謝の言葉を述べ伝えた。その時、デウィ・ウマイを連れて、サン・ヒヤン・マニックマヤはすぐに天空に飛び去り、天界に戻って行った。

サン・ヒヤン・マニックマヤが立ち去ると、ダスタンダル大王と商人ウマランはすぐに帰った。国に到着すると、ダスタンダル大王は、ペルシャの民衆、軍隊およびペルシャ国のもとに従属している王たちに、これからはサン・ヒヤン・マニックマヤを礼拝するように命令を下した。その命令を受け取った王たちはただ命令を実行しただけであった。彼らすべてはそれぞれの民衆に、分け隔てなく命令した。間もなくウマニという名の、商人ウマランの娘は嫁いで、ダスタンダル大王の妃となった。

伝えられるところによれば、間もなく、サン・ヒヤン・マニックマヤを敬う国々の王たちや高官たちは皆、敬虔な礼拝を捧げ、彼を崇拝した。敬虔な礼拝と彼を崇拝することにおいて願うことは、ほかでもなく、慎重で知恵に富むサン・ヒヤン・マニックマヤが王たちの願っているものを知り、また、彼を崇拝する者たちに忠告を与えてくれることであった。サン・ヒヤン・マニックマヤはトゥングル(Tengguru)山頂にある天界にある玉座で待機していた。彼は彼を崇拝する国々の領内の真ん中に座していた。

王や高官たちがそのような啓示を受けた後、トゥングル山の麓に礼拝所を建てた。彼らはマニックマヤを崇拝しなければならない場合、定まった場所を持っていた。色とりどりの礼拝所が作られた。色々な「宝石」(sosotya)で飾られ、光り輝く「金銀」が使われている様々な家具を揃えた礼拝所を作る者もいた。彫り物のある黄銅や「鉄」(tosan)、石で作る者もいた。完璧に組み立てられているので、非常に美しく見えた。

年の始まりに、ペルシャのダスタンダル大王と、人々がマニックマヤを信仰している国々の王や高官たちは共に礼拝所に出発した。彼らは色とりどりの衣装、非常に美しい飾り物そして香りの素晴らしい様々な香料を身に纏って、共に出発し、トゥングル山の麓に集まった。供物のための様々なご馳走を持ってくることを忘れなかった。彼らは、サン・ヒヤン・マニックマヤに敬意を払い、崇める印としてアスワ・メダ(Aswa-medea)と呼ばれる供物を広げた。彼らが行ったことはほかでもなく、「書物」(sastra) [聖典の教え] と慣習に従った。王たちはそれぞれの礼拝所で、礼拝し瞑想を行った。礼拝儀式を行うことによって彼らが望んでいたことは、神からの恵み、祝福を得ることだけであった。

その時、サン・ヒヤン・マニックマヤは、自分が全世界の神として崇められていることを、自分自身の目で自覚した。サン・ヒヤン・マニックマヤは瞑想し、すべての五感を閉ざし、生と死、初めと終わりを支配する最高神に指示をお願いした。すべての感覚、感情は消え失せて、一つになった。サン・ヒヤン・マニックマヤの願っていることが、アッラー(Gusti Allah)によって認められた。サン・ヒヤン・マニックマヤはレトゥナ・ドゥミラー(Retna-Dumilah)を開いた。それはサン・ヒヤン・ヌルチャヒヤ(Sang Hyang Nurcahya)から受け取ったものであった。天国および地獄の有様が突然、開かれ、拡がった。

マニックマヤを崇拝する王や高官たちおよび軍隊はすべてはっきり見えた。心の中

で彼らは地上界にいないかのように感じた。しかし昼のない光の世界にいるようでもあり、夜のない暗闇の世界にいるようでもあった。月も星も太陽もなかった。彼らは天国・地獄そしてその中のすべてのものを知った。サン・ヒヤン・マニックマヤがマデプラワカ(Madeprawaka) [燃える火の真ん中] の上に王妃デウィ・ウマ (ウマイ) と一緒に座っているのが見えた。サン・ヒヤン・マニックマヤは輝く光に包まれており、眩いばかりであった。王や高官たちおよび軍隊は彼を正視し、動くことはできなかった。彼らは天界の美しさにはなはだしく魅了された。

サン・ヒヤン・マニックマヤはすぐに次のように語った。「私の信徒すべての者よ。このようにお前たちすべての者は私がいかなる存在か知った。そういうわけでお前たちすべての者は、この私が主権者であることを目の当たりにしたのだ。主権者は支配するのであって、支配されることはない。創造者であって、創造されたものではないのだ」

王や高官たちおよび軍隊はすべて何度も跪き、次のように答えた。「おお、主権者であられる神よ、天国とその内にあるものの神よ、おお、至高の神よ。おお、地上界で成長するすべてのものの王よ。おお、三界で王位にある真実の神よ。私どもすべての者は共に、あなただけがすべての創造物を作られたことを確信し、証しを立てます。おお、神よ、あなたがすべての災厄および困苦を自ら消し去ってくれますように。果敢にも私どもはあなたと語っております。どうか私どもが後日、どの世界に住むことになるのか、知らせてください。明白な世界は、これまで明白に見られた世界とは異なりますか？」

そして王たちはまた尋ねた。「おお、創造物に対して大慈悲者であられる世界を支配なさる神よ、快樂を味わったり、利益を受ける時以外にも空腹感や眠気、疲労感を感じなくなった場合、どうか私たちがその場所に住むことをお許しください。太陽の光を浴びる世界にもう戻ることはないのでしょうか？」

「おい、私の信徒たちすべての者よ！」とサン・ヒヤン・マニックマヤは答えた。「いまだその時ではないので、それは認めない。お前たちは王になるように運命づけられているので、お前たちの誠意と聡明さにより軍隊と民衆すべてを災厄から守ることができる。もしお前たちが真剣にそのことを行うならば、やがて後日、そうすることは必要ではなくなるだろう。そのことはお前たちの義務だったからである！」

そのように語った後、サン・ヒヤン・マニックマヤはすぐにレトナ・ドゥミラーを

閉じて、天国・地獄を描いた絵を消した。王や高官たちおよび軍隊の視覚はすべて元の状態に戻った。月、太陽および世界中の光が以前のように見開かれた。王や高官たちおよび軍隊はいまだ茫然自失の状態にあり、ますます真剣になり、確信を確かなものとした。実にサン・ヒヤン・マニックマヤは全世界を創造した大王であると見なした。そのことは多くの人々の噂に従ったからではなく、自らが目撃した自らの確信によるものであった。それは普通の人間では成し遂げることのできないことであった。その後、すべての供物は軍隊全員にすぐに平等に分配された。彼らはそれぞれの国に帰って行った。

王たちが解散した後、サン・ヒヤン・マニックマヤはトゥングル山の頂上に天界を創造するつもりだった。その天界は非常に美しく装飾された。パパールヤ・ワルナ(Paparya-warna) [様々な色の中心]、トゥジョマヤ(Tejomaya) [輝く光のすべての中心]、アルガ・ドゥミラー(Arga-Dumilah) [創造の山の山頂] におけるカヒヤガン・ジョングリンサラカ(Kahyangan Jonggringsalaka)と名付けられた。その天界にはバレ・マルチュクンダ(Bale Martyukundha)、バレ・マラカタ(Bale Marakata)、コリ・スラ・マタンクップ(Kori Sela-matangkep)門およびウォト・シオガル・アギル(Wot Siogal-agil) [七つに分かれた髪の毛のような通路] が備えられたが、すべては完全であり、少なくとも多くもなかった。

そしてサン・ヒヤン・マニックマヤは三界(Triloka)を支配し続けた。三界とは上界、中界、下界である。上界と下界は『ジタプサラ』(Jitapsara)ではスニャ・ルリ(Sunya-ruri)界と呼ばれ、精霊および霊的な体を持つあらゆる創造物の世界である。精霊たちもサン・ヒヤン・マニックマヤを神として崇拝した。中界は地上界であり、人間や肉体を持ったあらゆる創造物が住む世界である。その時以来、サン・ヒヤン・マニックマヤはサン・ヒヤン・ジャガドナタ(Sang Hyang Jagadnata)と称した。すなわち世界の王である。

サン・ヒヤン・マニックマヤが世界の王になった時、ペルシャやビルジスタン、アフガニスタン、カシミール、タルタル(タタール)、ティベット、日本、中国、インド、スロン[スリランカ]、モンガリ[モンゴル]、ブトン、アンナム(ベトナム)、カンボジア、シユム(タイ) およびアジア大陸南部の国はすべて仏教を信仰し、サン・ヒヤン・マニックマヤを礼拝した。そのことはヒンドゥー暦 502 年のことであり^③、パンチャマカラ(Pancamakala)時代以後のことである^④。アダム暦によれば太陽暦 4886

年、太陰暦 5032 年のことであった⁶⁾。その時、サン・ヒヤン・マニックマヤは 33 歳になったばかりであった。ところでアラブの国（預言者時代）では、まだ預言者ムサ（モーセ）の律法を使っていた。その時代、預言者イサ(Nabi Ngisa、イエス)⁶⁾はまだ生まれていなかった。その時代、インド国とその周辺およびアジア大陸の島嶼部はすでに人間が住んでおり、ほとんどすべての人々は仏教を信仰しており、サン・ヒヤン・マニックマヤを礼拝していた。一方、マニックマヤを信仰し、礼拝していない国は、アラブ国、イスラエルの子孫ユダヤおよびブルサーすなわちアジア・トルコ地域であった。

8 神々の系譜が次第に発展し広がっていく

伝えられるところによれば、サン・ヒヤン・ジャガドナタはすでに全世界の王たちの王になり、子孫を残す、すなわち子供を持つことを願った。彼は昼も夜もいつも王妃であるデウィ・ウマと性交した。人間がやるように精神と肉体を一体化した。間もなくデウィ・ウマは妊娠した。時至って、彼女は男の子を生んだ。その子の放つ香りのよい匂いは全世界に広まった。その子はバタラ・サンブ(Bathara Sambu)と名付けられた。

バタラ・サンブが誕生した時、すなわちサン・ヒヤン・ジャガドナタが子供をもうけた時は、パンチャマカラ時代のことであり、ヒンドゥー暦 504 年にあたる。アダム暦によれば太陽暦 4888 年のことであり、太陰暦 5034 年のことであった。

2 年の間をおいて、デウィ・ウマはまた妊娠した。生まれる時に至ると、彼女はまた男の子を生んだ。燃える火と共に生まれ、その火は大空に広がった。そしてバタラ・ブラフマ(Bathara Brahma)と名付けられた。2 年の間をおいて彼女はまた男の子を生んだ。彼はものすごい地震と共に生まれ、全世界にもものすごい災害をもたらした。そしてバタラ・エンドラ(Bathara Endra)と名付けられた。またおよそ二年経つと、彼女はまた男の子を生んだ。彼は大暴風と共に生まれ、あらゆる種類の植物が倒れた。そしてその子はバタラ・バユ(Bathara Bayu)と名付けられた。

サン・ヒヤン・ジャガドナタは 4 人の男の子をもうけた後、彼は次のような声を聞いた。「おい、我が子マニックマヤよ、お前は多くの人間がするように、お前の妻と性交ばかりしてはならない。もしそれを続けるならば、お前は勇敢さや神霊力を持つ子をもうけることはできないだろう。そしてお前自身と家族すべての者に対して栄

光を称える者はいなくなるだろう。それゆえお前とお前の妻は瞑想し崇めるのだ。あらゆる意志や願望を超え、あらゆる創造物に勝る、完全なる子をもうけることができるように、お前の愛情を請い願うのだ。お前は私の存在を疑ってばかりいてはならない。実際、この私はお前と一体になったのだ。お前が願うものは何でも、真剣な意志が伴うならば、必ず私は叶えてやろう。お前が純粹に崇め奉るならば、お前の妻との夫婦の営みを行う場合、普通の人間のものであってはならない。お前はお前がすでに理解している性行為を行わなければならない」

サン・ヒヤン・ジャガドナタはそのような不思議な声を聞いた後、すぐに妻と一緒に熱心に崇め奉り、瞑想を行った。五感を払い去って、想念を清らかにした。その結果、人間的な性質は消えた。サン・ヒヤン・ジャガドナタ自身を見ることのできる者はいなくなった。彼自身を包む、色とりどりに燃え上がる光が存在するだけだった。そのことはあらゆる賛美、祈りが聞き届けられた証であった。そしてサン・ヒヤン・ジャガドナタはすぐに、彼の妃デウィ・ウマと性行為を行った。賛美、祈り、瞑想を行った。

間もなく王妃デウィ・ウマは妊娠した。時が至ると、神秘的に包まれた男の子が生まれた。天空には雷鳴が轟き、火山の爆発音によって迎えられた。その結果、恐ろしい災害と暗闇が生じた。暴風が吹き荒れ、海の波が煮えたぎり、大地は地震で揺れ動いた。海水は暴風によって殴られたかのようにであり、波は煮えたぎっていた。大洋の海水は陸地に乗り上げた。大洪水が起こり、インド国のほとんど全領域は水浸しになった。

サン・ヒヤン・ジャガドナタの第5子が生まれた時、インド国の全域およびその周辺すなわちアジアの全域で、王たちはサン・ヒヤン・ジャガドナタを礼拝し、崇め奉った。気楽な気持ちで玉座に座っていた王たちはすべて倒れ、すぐに跪いて礼拝した。その時、玉座マデプラワカ(Madeprawaka)の上に座っていたサン・ヒヤン・ジャガドナタ自らも共に倒れた。それと同時に、サン・ヒヤン・ジャガドナタは不思議な声を聞いた。

「おい、我が子、マニックマヤよ、知るがよい。生まれた子に私はバタラ・ウィスヌ(Bathara Wisnu)の名をあたえる。それは黒を意味する。すぐに目は光り輝く。その子は教えられたり、知らされる前に何事も知ることができるのだ。そのほかに、私はバタラ・クサワ(Bathara Kesawa)の名もあたえる。それは完全なる矢じりを意味す

る。その子が生まれた時、お前自身および王たちがすべて座っている場所から倒れたからだ。それはお前の子の神靈力に適う者がいないことをしめす証である。お前の願いが叶えられたので、私はお前の子に、神秘的で完全なる戦士のワヒユ(wahyu、啓示)を入れる。そしてこの全世界はお前の子供の誕生を褒め称える」

サン・ヒヤン・ジャガドナタはそのような不思議な声を聞いて、非常に幸福な気持ちになった。そして彼の子はすぐにバタラ・ウィスヌ別名バタラ・クサワ(Bathara Kesawa)と名付けられた。サン・ヒヤン・バス(Sang Hyang Basu)、サン・ヒヤン・クストゥ(Sang Hyang Kestu)、サン・ヒヤン・サハスラ・スマン(Sang Hyang Sahasra-suman)の称号もあたえられた。そしてその子はすぐに生命の水を注がれて、彼の顔は輝く光に包まれて、見目麗しくなり、彼の兄弟たちと全く異なっていた。それゆえ、父親の愛情は彼に注がれた。バタラ・ウィスヌが誕生した後、サン・ヒヤン・ジャガドナタは王妃との夫婦の営みを遠ざけた。

伝えられるところによれば、『ジタプサラ』に記されているように、サン・ヒヤン・ヌラサ(Sang Hyang Nurrasa)の末っ子はサン・ヒヤン・プラマナウィスサ(Sang Hyang Pramanawisesa)別名サン・ヒヤン・タヤ(Sang Hyang Taya)とも呼ばれるが、彼にはすでに4人の子供がいた。長子サン・ヒヤン・パルマ(Sang Hyang Parma)はすでにサン・ヒヤン・プラマナ(Sang Hyang Pramana)という子がいた。サン・ヒヤン・プラマナはデウィ・タッピ(Dewi Tappi)という子がいた。このデウィ・タッピはサン・ヒヤン・ダラムパラン(Dewi Dharampalan)という名の、動物の姿をした精霊と結婚した。サン・ヒヤン・ダラムパランには、いずれも動物の姿をした4人の子供がいた。1) サン・ヒヤン・ウィナタ(Sang Hyang Winata)は鳥の姿をしていた。2) サン・ヒヤン・アグリ(Sang Hyang Agli)はマングースもしくはイタチの姿をしていた。3) サン・ヒヤン・カルパ(Sang Hyang Karpa)は水蜂の姿をしていた。4) サン・ヒヤン・コワラ(Sang Hyang Kowara)は牛の姿をしていた。その後、動物の姿をした神々の系譜が続いていくことになる。

サン・ヒヤン・ウナン(Sang Hyang Wenang)の長子でサン・ヒヤン・デワ・エサ(Sang Hyang Dewa Esa)別名サン・ヒヤン・フニン(Sang Hyang Hening)とも呼ばれる者は、計12人の子供がいた。真ん中の子で、サン・ヒヤン・サンガナ(Sang Hyang Sanggana)あるいはサン・ヒヤン・パルティタラ(Sang Hyang Partitala)とも呼ばれる者はその後、シラサギの姿をした神および大蛇の姿をした神々の系譜を作り上げていくことに

なる。

サン・ヒヤン・フニンの 8 番目の子供で、サン・ヒヤン・ヘルマヤ(Sang Hyang Hermaya)と呼ばれる名の者は、水棲動物の姿をした精霊と結婚した。そして彼らはサン・ヒヤン・ガンガ(Sang Hyang Gangga)という名の子供をもうけた。彼はサン・ヒヤン・バルナ(Sang Hyang Baruna)など、すなわち水棲動物の姿をした神々を生んだ。

サン・ヒヤン・ウナンの末っ子でデウィ・ヤティ(Dewi Yati)と呼ばれる者は、サン・ヒヤン・アナンタ・デワ(Sang Hyang Ananta-dewa)という名の大蛇の姿をした精霊と結婚した。そしてサン・ヒヤン・アナンタ・ナガ(Sang Hyang Ananta-naga)という名の子をもうけた。その子は後に、サン・ヒヤン・アナンタボガ(Sang Hyang Anantaboga)という名の子供らを生む。彼らは大蛇の姿をした神々である。

サン・ヒヤン・トゥンガル(Sang Hyang Tunggal)の 4 番目の子供で、サン・ヒヤン・イスマヤ(Sang Hyang Ismaya)別名サン・ヒヤン・スマラ(Sang Hyang Semara)、別名バタラ・スマル(Bathara Semar)と呼ばれる者はスニャ・ルリ界(霊界)にいる。彼はサン・ヒヤン・ジャガドナタの兄である。彼にも計 10 人の子供がいた。1) 長子はサン・ヒヤン・ウルク・アン(Sang Hyang Wungku-an)別名サン・ヒヤン・ボンコカン(Sang Hyang Bongkokan)という名である。2) 第 2 子はサン・ヒヤン・シワー(Sang Hyang Siwah)。3) 第 3 子はサン・ヒヤン・ウラハスパティ(Sang Hyang Wrahaspati)。4) 第 4 子はサン・ヒヤン・ヤマディパティ(Sang Hyang Yamadipati)。5) 第 5 子はサン・ヒヤン・スニャ(Sang Hyang Sunya)。6) 第 6 子はサン・ヒヤン・チャンダ(Sang Hyang Canda)。7) 第 7 子はサン・ヒヤン・クウェラ(Sang Hyang Kuwera)。8) 第 8 子はサン・ヒヤン・タムブル(Sang Hyang Tamburu)。9) 第 9 子がサン・ヒヤン・カマジャヤ(Sang Hyang Kamajaya)。10) 第 10 子がデウィ・サルマナ・シティ(Dewi Sarmana-siti)。

ところで『ジタプサラ』に記されているところによれば、すべての神々の中でサン・ヒヤン・カマジャヤの容貌の見目麗しさに匹敵できる者はいなかった。伝えられているところによれば、彼だけが預言者ユスブ(Nabi Yusup、ヨセフ)⁷⁾に対抗することができた。ユスブの見目麗しさは全世界でことのほか有名だった。

サン・ヒヤン・ジャガドナタが全世界を支配している時、それらの神々はすべてサン・ヒヤン・ジャガドナタの天界で王になるために謁見にやって来た。そして彼らに

はそれぞれの場所があたえられた。森や山に住む者もいた。特定の国々に住む者もいた。僧侶になる者がいた。王になる者がいた。トゥングル山すなわちヒマラヤ山の山頂にある天界に居住する神になる者もいた。

サン・ヒヤン・ジャガドナタの子供たちは大人になった後、みんな彼らの従兄弟すなわちサン・ヒヤン・ウナンの兄、サン・ヒヤン・ダルマ・ジャカ(Sang Hyang Darma-jaka)の曾孫たちと結婚した。

明らかなことだが、サン・ヒヤン・ダルマ・ジャカにはサン・ヒヤン・パンチャ・ルシ(Sang Hyang Panca-resi)という名の子供がいた。サン・ヒヤン・パンチャ・ルシには 11 人の子供がいた。サン・ヒヤン・パンチャルシの長子はサン・ヒヤン・グルウェッダ(Sang Hyang Guruweddha)別名はサン・ヒヤン・マハルシケトゥ(Sang Hyang Maharsiketū)というが、彼には 4 人の子供がいた。1) デウィ・ススティカ(Dewi Sustika)はサン・ヒヤン・サムボと結婚した。2) デウィ・サチカ(Dewi Sacika)はサン・ヒヤン・ブラフマと結婚した。3) デウィ・ウィランチカ(Dewi Wirancika)はサン・ヒヤン・エンドラと結婚した。

ところでサン・ヒヤン・パンチャ・ルシの第2子は、サン・ヒヤン・パンチャ・ウエッダ(Sang Hyang Panca-weddha)別名サン・ヒヤン・マハルシ・バルラ(Sang Hyang Maharsi Barla)と呼ばれ、彼には三人の娘がいた。1) デウィ・スワムニャナ(Dewi Swamnyana)はサン・ヒヤン・サムボと結婚した。2) デウィ・サラスワティ(Dewi Saraswati)、3) デウィ・ララスワティ(Dewi Raraswati)は二人ともサン・ヒヤン・ブラフマと結婚した。

サン・ヒヤン・パンチャ・ルシの5番目の子供はサン・ヒヤン・ルシ・ウィクスマカ(Sang Hyang Resi Wiksmaka)と呼ばれ、二人の娘がいた。1) デウィ・スリ・ラクスマ(Dewi Sri Laksmi)、2) デウィ・スリ・ラクスマタ(Dewi Sri Laksmita)といい、サン・ヒヤン・ウィスヌと結婚した。

サン・ヒヤン・パンチャ・ルシの6番目の子はサン・ヒヤン・ルシ・サティヤ(Sang Hyang Resi Satya)という。彼の長女はデウィ・スリ・サティヤワルナ(Dewi Sri Satyawarna)といい、サン・ヒヤン・ウィスヌと結婚した。

サン・ヒヤン・パンチャ・ルシの7番目の子供はサン・ヒヤン・ルシ・ジャナカ(Sang Hyang Resi Janaka)といい、彼にはデウィ・ニグニャタ(Dewi Nignyata)という名の娘しかいなかったが、娘はサン・ヒヤン・ウィスヌと結婚した。サン・ヒヤン・パン

チャ・ルシの8番目の子は、サン・ヒヤン・ルシ・ソマ(Sang Hyang Resi Soma)というが、彼には3人の娘がいた。長女はデウィ・ラティ(Dewi Ratih)といい、彼女の容貌の美しさは非常に有名だった。その当時、神々の世界でデウィ・ラティの美しさに比べることができる者はいなかった。このデウィ・ラティはサン・ヒヤン・カマジヤヤと結婚した。彼はサン・ヒヤン・イスマヤの息子であり、彼の容貌の見目麗しさも非常に有名だった。ところでサン・ヒヤン・ルシ・ソマの第2子はデウィ・スミ(Dewi Sumi)といい、サン・ヒヤン・バユと結婚した。

それ以外に、神々は自分たちの子供を彼らの一族の者たちと結婚させた。けれども地上界の国や村にいる人間と結婚した者もいた。その結果、神々の系譜は広がり続け、子孫が増えていった。その当時、トゥングル山の周辺の人々は、精霊たちとお互い仲良く生活し、お互いに話し合った。すでに前に述べたように、神々の物語によって、多くの者が同じ血族だと見なされたからである。

9 ペルシャの西側の人々の信仰

伝えられるところによれば、神々が代々にわたって非常に多くなった後、サン・ヒヤン・ジャガドナタは全世界の人々がすべて彼を神として崇め、礼拝してくれることをいつも考えて続けていた。以前から願っていたように、特に、ペルシャ国の西側の全域(イスラエル国、アラブ国およびトルコ国)に住んでいる者たちも彼を神として崇め、礼拝するように考えていた。すでに何度も信仰を広めたり、そこの人々を連れて来るために神々が派遣された。彼らは様々な方法を使ったが、神霊力を用いて様々な災害をもたらすことも含まれていた。しかしそこの人々はその意図に惹かれたり、従うことは少しもなかった。それどころか多くの者は彼らを軽蔑した。彼らは多くの神々について、世界を創造したアッラーに対して忠実ではないことを知ることになった。

サン・ヒヤン・ジャガドナタはその後、黒魔術を広めることによって彼らを屈服させようとした。彼の願っていることは叶えられた。そしてイスラエル国やアラブ国の人々の多くは災害や疫病により亡くなった。その時、トルコの全域の国は魔術が広まり、ものすごい惨禍に見舞われた。それでも現地の高官や民衆たちはすべて少しも恐ろしいとは思わなかった。それどころかアッラーを礼拝する信仰心はさらに強まった。災厄がすぐに消えるように祈った。すると間もなく、災厄はすぐに消えた。

災厄が消えた後、サン・ヒヤン・ジャガドナタはますます不安になった。ペルシャの西側の人々が彼の計略によって少しも動揺しなかったからである。そしてインドやその周辺の人々に対して行ったように、彼らを屈服させようとする彼の目論見は、行き詰まったかに思われた。遂に彼は激怒して、戦争によって彼らを屈服させようとした。彼はウムプ・ラマディ(Empu Ramadi)とも呼ばれるバタラ・ラマヤディ(Bathara Ramayadi)と、ウムプ・アンガジャリ(Empu Anggajali)とも呼ばれるバタラ・アンガジャリ(Bathara Anggajali)に命令を下した。ウムプ・アンガジャリはウムプ・ラマヤディの子供である。二人の神は様々な武器、武具を作った。

伝えられるところによれば、その二人の神は神霊力が強いことで有名だった。ウムプ・ラマディは武器を作っている時、雲の上すなわち山の頂上にいた。一方、ウムプ・アンガジャリは海の真ん中にいた。武器を作るためには足と手だけで充分だった。作り終わるとすぐに、舌で舐めることによって、メッキをかけた。武器を作るときには火は使わなかった。すべては鋼鉄だった。握って息を吹きかけると、火の中で溶けるように、すぐに砕けた。神々によって作られた武器は多種多様だった。ドウンダ(dhendha、棍棒)、ガンディ(gandhi、金槌)、アルゴラ(alugora)、ムサラ(musala、槌)、トリスラ(trisula、三叉の槍)、クンタ(kunta、短い槍)、チャクラ(cakra、刃のついた円盤)、チャンドラサ(candrasa、長剣)、ヌンガラ(nenggala、槍)、リムプン(limpung、短槍)などである。

それらの武器が献上された後、サン・ヒヤン・ジャガドナタは喜んだ。それらの武器はすぐに神々に分けられた。すぐにアラブとイスラエルの国を侵略するために出発するように命じられた。神々はすぐに任務を果たすために出発した。将軍になった者はサン・ヒヤン・ジャガドナタの息子たちであった。目的地に到着するとすぐに大きな町を破壊した。アラブ、イスラエルの国およびその周辺の王たちや軍隊はすべて敗北を喫した。神々の力や勇敢さや神霊力に対抗することはできなかった。それでもなお心が動揺する者はいなかった。彼らすべては国を離れ、避難する道を選び、森や山に逃げた。そのため神々は怒り、いらいらした。

戦争が山場を迎えた時、サン・ヒヤン・ジャガドナタは次のような声を聞いた。「おい、マニックマヤよ、お前はペルシャの西側の人々に宗教を強制し続けてはならない。知るがよい。ペルシャの西側の人々は Kang Murbeng Pasthi (アッラー) によって庇護されているのだ。彼らはしっかりと自らの宗教を守り、信仰しなければならない。

お前は彼らを支配してもよいという許しは受けていない。お前が支配することを許されている地域は、ペルシャの国境から東までだ。またお前は知るがよい。Kang Murbeng Pesthi はアッラーの霊であると自認する預言者イサを生むことになっている。彼はイスラエル国で生まれる。彼はイスラエル人の子孫である。預言者イサはお前よりも優れた能力、神霊力、崇高さを持っている。彼こそ後にお前の敵となるであろう。しかしやがて彼はこの世に長く生きることはない。それゆえ、お前は戦争をしている神々を引き上げさせるがよい」

そのような声を聞いた後、サン・ヒヤン・ジャガドナタは非常に驚き、不安になり、悲しくなった。彼は靈感を通して、戦うように命じられている子供たちに、戦闘をすぐにやめるように命じた。ペルシャの西側で戦っていた神々は、サン・ヒヤン・ジャガドナタの靈感を受けた後、すぐに消えて、トゥングル山の山頂にある天界に帰った。天界に到着すると、彼らは不思議な声の内容を初めから終わりまですべて知らされた。そして神々は驚き、悲しくなった。

『キタブ・ムサラル』(*Kitab Musarar*)および『ジュス・アル・グベト』(*Jus al-Gubet*)と内容を同じくする『ジタブサラ』に記されているように、西暦元年12月25日月曜日、ヒンドゥー暦によればパンチャマカラ時代の699年、アダム暦によれば、太陽暦5083年、太陰暦5235年に、アッラーはデウィ・マリヤム(Dewi Maryam、マリア)⁽⁸⁾を通して預言者イサを生んだ。彼はアラブ国の北側にあるイスラエル国のエルサレムという名の町にいた。

預言者イサが生後一ヶ月経ったとき、非常に賢明なサン・ヒヤン・ジャガドナタは、預言者イサがイスラエル国にいることを知った。サン・ヒヤン・ジャガドナタはすぐに、精霊のように見えない姿になって、彼を知ろうとした。5人の子供を従えて、全世界でも申し分のない預言者イサの容貌を知りたかった。間もなく、彼はイスラエル国に到着し、そのままデウィ・マリアの居場所に向かった。その時、サン・ヒヤン・ジャガドナタと子供たちは精霊の姿のままであった。その時、預言者イサは母親の膝のところにいた。

その赤子を見た時、サン・ヒヤン・ジャガドナタは非常に驚いた。その赤子が輝く光に包まれており、姿は半透明であり、彼こそが明らかにアッラーの愛する子であることの証であった。しかしサン・ヒヤン・ジャガドナタを驚かしたものは、もう一つあった。申し分なく完全であり、全世界に存在するあらゆるものを超越しているのに

もかかわらず、彼はすでに生後一ヶ月を経た普通の人間の赤子の姿のままだったからである。

サン・ヒヤン・ジャガドナタは子供たちに次のように語った。「おい、我が子たちよ。あの赤子は能力と完全さにおいてはまったくもって明らかだ。私自らを明らかに凌駕している。しかし生後一ヶ月であるのに、いまだ歩くことができないぞ。彼はほかの人間の赤子のように普通の赤子に見える」

そのように語ったその時、サン・ヒヤン・ジャガドナタの左足が切り取られた。彼は驚いた。そして彼は赤子と母親を皆殺しにしようと思った。彼の子供たちも同意した。彼はすぐに相手の神霊力を打ち負かす呪文を繰り返し唱えたが、いつも効き目があるわけではなかった。彼は相手の神霊力を打ち負かすための呪文を何度も試みたが、全く効果がなかった。赤子を殺そうとしたためにサン・ヒヤン・ジャガドナタは自己を見失っていた。彼と子供たちは神の定めた運命の意志を認め、従うこと以外に仕方がなかった。さらに、心の中で彼は預言者イサがこの世に長く生きることにはできないということがわかっていた。

その後、サン・ヒヤン・ジャガドナタと子供たちはすぐに姿を現し、デウィ・マリアに絹の布の貢物を献上した。彼らの持っていた神秘術が破れ、屈服した証として、預言者イサのオムツの布として使ってほしかった。服従の証をあたえた後、サン・ヒヤン・ジャガドナタはサン・ヒヤン・ルギン(Sang Hyang Lengin)の称号を得た。その後、彼と子供たちはすぐにトゥングル山の頂上にある天界に帰った。

10 ジャカ・スンカラ別名アジサカの誕生と遍歴

伝えられるところによれば、『 Kitab Miladuniren 』(Kitab Miladuniren)と内容を同じくする『ジタプサラ』に記されているように、プラブ・サルキル(Prabu Sarkil)という名の小さな国の王がいた。彼はトルコ地域に属するナジュラン(Najran)で王位に就いた。サン・プラブ・サルキルは預言者イスマイル(Nabi Ismangil)⁽⁹⁾の子孫だった。彼は商売を行うことが大好きだった。ある日、王は様々な国産の商品を帆船に載せてインド国に出かけようとした。彼の出国する時には王国の儀式を行わなかった。王がインドの海域に到達した時、大きな海難に見舞われた。王が乗っていた帆船が猛烈な暴風に会い、沈没した。王の軍隊は死んでしまった。商品はすべて全滅し、残されたものはなく、沈んでしまった。王はとり残され、死ぬことはなく、大海の波の中

で、沈んだり、浮いたりしていた。その時、ウムプ・アンガジャリはインド洋の真ん中で武器を作ろうとしていた。船が沈み、乗組員たちが死に、ただ一人だけが生きていて、波にもまれて浮かんでいるのを見た時、ウムプ・アンガジャリは可哀そうに思った。その者はすぐに助けられ、陸に運び込まれた。しかしその時、王は水を吐いてばかりいた。けれどもやがて彼は意識を取り戻して、すぐに座った。王は、自分を見舞った非常に恐ろしい災難のことを考えると、非常に悲しくなった。彼は陸に着いて安全な身になるだろうとは思ってもみなかった。彼の目の前には、容貌の見目麗しい若者がいた。王は、その者が必ずや彼を災難から救い出してくれるだろうと思った。王はすぐにウムプ・アンガジャリに近づいて、知恵を絞って彼の前に座り、次のように語った。「おお、我が子よ。世界の至宝よ。私は生きることができようとは思わなかった。私の考えの中には死ぬことしかなかった。私を襲った大災害から解放されたので、今、私は恵み深き幸運を感じている。それらすべてはあなたの愛情ゆえであることはほかでもなく明らかなことだ。あなたには大きな負債を負っているのです、私はこの善行に報いることができない。それゆえ我が子よ。私は私の生死をあなたに委ねることができるだけだ。たとえ殺されても、私は委ねることしかできないのだ。少しも不安でもないし、怖くもない。私の心が平安でありますように。あなたは名前が誰であり、あなたの出自がどこなのか喜んで語ってくれますように」

ウムプ・アンガジャリは心が引き裂かれるかのように、それらの言葉を聞いて、次のように答えた。「おお、我が父よ。あまり多くを語らないでください。憐れみの気持ちが生まれますから。ところで我が父である王は災難から逃れることができました。ほかでもなく我が父自らの幸運によるものです。すべてはサン・ヒヤン・ジャガドナタのご加護によるものです。私はほかでもなく、その仲介役に過ぎません。我が父は私の名前と出自を尋ねました。私はウムプ・アンガジャリであり、バタラ・ラマヤディの子であり、サン・ヒヤン・ラマプラワ(Sang Hyang Ramaprawa)の孫であり、サン・ヒヤン・フニン(Sang Hyang Hening)の曾孫です。そしてサン・ヒヤン・ジャガドナタとは兄弟の関係にあります。ところで我が父はどこの国の出身で、名前は何と言いますか？」

王は自分の名前は誰であり、どの国の出身であるかを明らかにした。彼がどの国から来たのかを、初めから終わりまで説明した。

王の話聞いてから、ウムプ・アンガジャリは非常に悲しくなり、心の奥底から同

情心を示した。そして彼は王に対する敬意の印として、座り方を変えた。王はウムプ・アンガジャリの礼儀正しさと容貌の見目麗しさを見て、非常に喜んだ。そしてすぐに彼は非常に繊細な言葉を使って話した。「おお、我が子よ。息子であるアンガジャリの憐れみと手助けに対して少しの報いもできない。そうではあっても、このように燃え上がる父の願いゆえに、せめて一日でもいいから、あなたが、父の国にいる母である王妃に会いに来てほしい。息子に私は敬意を表し、私はそれ相応の王国の宴で歓迎する。ところで、父には一人の娘がいる。彼女はまだ処女である。私の娘を息子の召使として献上しよう。それが息子の心を喜ばせるならば、尽きることのない幸福に感謝する」もし王の願いを拒んだりしたら、ウムプ・アンガジャリは必ずや後悔し失望するだろう。それゆえ彼は王の願いに従わざるをえなかった。

手短に言うと、ウムプ・アンガジャリは王に従い、ナジュラン国に行った。目的とされる場所に到着すると、彼はすぐにデウィ・サッカ(Dewi Sakka)という名の王の娘と結婚した。彼らはずっと仲睦まじかった。間もなく王女は妊娠した。妊娠して3か月すると、ウムプ・アンガジャリは王にインドの地に戻る暇乞いをした。彼自身はサン・ヒヤン・ジャガドナタからあたえられた任務を行っている最中だったからである。彼は神々のために武器を作っていた。長い間その任務を行えない場合、彼はサン・ヒヤン・ジャガドナタの怒りを買うことを、非常に恐れていた。たとえ本当であるにしても王は認めなかったが、ともかく王は彼に許しをあたえた。ウムプ・アンガジャリは、もし男の子が生まれたら、ジャカ・サンカラ(Jaka Sangkala、スンカラ)と名付けるように注文しただけだった。もし女の子なら、どのような名前を与えようとも構わなかった。ウムプ・アンガジャリはすぐに天空に飛び上がり、インド国に帰った。

ウムプ・アンガジャリが去り、彼の妻が妊娠し、出産の時が訪れた。彼女は、赤子がすぐに生まれるように、薬をあたえられ、面倒をみてもらった。しかし妊娠して10か月経ったが、まだ生まれなかった。あらゆる薬が試されたが、効き目はまったくなかった。それらすべてのことが王の心をひどく悲しめた。そのため王は主の意志に委ねることしかできなかった。妊娠の時期が2年続いた後、アンガジャリの妻はようやく一人の男の子を生んだ。容貌は見目麗しく、光り輝いていた。彼は秘密の御印を帯びていた。彼の目と舌は赤色だった。誕生の時、その赤子はすでに清らかであり、後産(あとごん)や血は付いていなかった。そしてまた姫もまたすぐに健康になり、出産したばかりだとはまったく見えなかった。その赤子は母親の乳を飲もうとはせず、

自分の指をしゃぶっているだけだった。そのため彼はすぐにスンカラ(Sengkala)と名付けられた。ウムプ・アンガジャリの妻、デウィ・サッカがジャカ・スンカラを生んだ時、パンチャマカラ時代に始まるヒンドウー暦によれば704年である。アダム暦によれば、太陽暦5088年であり、太陰暦5260年にあたる。西暦によれば紀元5年のことである。

ジャカ・スンカラが歩けるようになってから、しばしば家の上を飛んだ。それはその子がまだ神の子孫であることを証するものであった。彼は8歳になって、祖父によって学校に入れられ、ウラマ(学者)や僧侶たちからコーランの読み方を教えられた。彼の能力は人並外れていた。彼はあらゆる書物を読破したどころか、彼の能力は教師たちよりも勝っていた。25歳になってから、彼はいつも彼の祖父に彼の父の名前と居場所を教えてくれるように尋ねた。ジャカ・スンカラは彼の父に会いに出かけるために、暇乞いをした。それでも彼の祖父と母は教えることも、許可することもしなかった。しかし彼はもう我慢することができなかつたので、彼の祖父は許可せざるをえなかつた。

ジャカ・スンカラはすぐに暇乞いし、祖父と母に敬意を払うことを忘れなかつた。子供に暇乞いされた後、王女の顔はすぐに涙を流し、泣いた。そして彼女は次のように言った。「おお、我が子よ。私の恋い慕うあらゆる大海はいつも心を結び付けてくれる。私の愛はただお前に注がれている。風や火、空、地、海そして山がお前から離れることがないように。いつまでもお前の安寧を見守ってくれるように」

ジャカ・スンカラは何度も感謝の言葉を述べ、天空に飛び去り、インド国に向かつた。残された者はいつも心配し悲しむ。

ジャカ・スンカラは師を探す

ジャカ・スンカラはインド国に到着すると、いつも目を見張って父を探した。間もなく注意深い目によって、彼はひとり人間が、海面の上に座って、鋼鉄や他の様々な武器を作っているのを見た。火やその類のものによらず、ただ手と口から出す息だけで作っていた。ジャカ・スンカラはそれこそ彼の父親であることがわかつていた。彼はすぐに父に会うために天から降りた。その時、ウムプ・アンガジャリは非常に驚いた。見目麗しい子供が空から降りてきて、水面の上に座ることができたからである。ジャカ・スンカラは父によって、名前は誰であり、望みは何であるかを尋ねられた。

ジャカ・スンカラはすぐに自分のことおよび出自を初めから終わりまで語った。語られなかったことは少しもなかった。ウムプ・アンガジャリは非常に喜び、ジャカ・スンカラを抱きしめ、顔を撫で、次のようなことを教えた。「おい、我が子よ。私は大人になった我が子に会えるとは思っていなかった。大人になったどころか私のように神霊力を持ち、空に飛び去り、水面の上に座ることができる。知るがよい。ウムプ・アンガジャリを名乗る者は他でもなく、私のことであり、お前の父親なのだ！」

ジャカ・スンカラはウムプ・アンガジャリの言葉を聞いた後すぐに、お辞儀をした。その時、ウムプ・アンガジャリは次のような言葉を続けた。「おい、我が子よ。お前は私と会ったのだから、もうナジュラン国に戻るがよい。お前の祖父や母に従い、王国でのお前の権威を自覚するのだ。もしお前が私と行動を共にするならば、お前はさらに苦しむことになる。この私はある種の精霊だからだ。サン・ヒヤン・ジャガドナタからあたえられた義務を行っているのだ。だから武器を作っているのだ」

「おお、我が父よ！」とジャカ・スンカラは言って、次のように答えた。「私は王国で権威を味わうことはそれほど好きではありません。私の好きなことは、より優れた能力を獲得できるように、両親の願望や行動に従うことです」

ウムプ・アンガジャリは自分の子の願望に従った。ジャカ・スンカラは少しも気を抜くことはなく、様々な鋼鉄を作っている父にいつも気を留めていた。彼は心の中で驚いていた。彼の父の神霊力の凄さに及ぶことのできる者は地の上にも天の下にもいないと思った。彼は優しく尋ねた。「ねえ、お父さん。私が人生を歩んでいく中で、お父さんのような物凄い神霊力を持った人に会ったことはありません。おそらく全世界で、お父さんのようなものすごい神霊力に及ぶことのできる人はいないでしょう。お父さん。私は弟子になることを願い求めます」

ウムプ・アンガジャリは次のように答えた。「我が子よ、知るがよい。私は普通の神のように自分の役割を果たしているだけだ。神霊力の凄さが全世界を凌駕している者がまだいる。その者はバタラ・ラマヤディであり、ウムプ・ラマディとも呼ばれている。彼が武器を作っている時は、雲の中か山の頂上にいる。あらゆる種類の鉄は彼が凝視すると、火にあたって砕けるように粉々になった。バタラ・ラマヤディは他でもなく私自身の父であり、他でもなくお前自身の祖父なのだ」

「お父さん、もしそうならば、私はあなたの弟子にはなりません！」「私は祖父を師に仰ぎたく願います！」とジャカ・スンカラは言った。

ウムプ・アンガジャリは子供の願いを認めた。ジャカ・スンカラはすぐに敬意を表すお辞儀をして、天空に飛び去った。

天に到達するとすぐに、ジャカ・スンカラは見回して、インド地域の上空のすべての雲に目を凝らして見回した。彼はじっくりと観察すると、虹がトゥングル山の近くに架かっているのを見た。近づいてみると、鉄を作っている者がおり、輝く光に包まれて、雲の上にいる。ジャカ・スンカラは、その者こそ彼の祖父であると思い、祖父の前で対面し、思慮深く座った。バタラ・ラマヤディはその者が彼自身の孫であることがわかっていて、すぐに次のように質問した。「おい、我が孫であるスンカラよ、ウムプ・アンガジャリの息子でもある。お前は無事にやって来たか？ 知るがよい。お前が見ているこの私はお前の祖父なのだ」

ジャカ・スンカラは感謝の言葉を述べ、自分の胸を撫でまわした。心の中で彼はますます驚いた。まだ来たばかりで、名前も出自も彼の話も紹介していないのに、祖父はすでに名前を呼んで歓迎し、彼を自分の孫だと語った。彼は、世界で完全無欠な師を得て、彼の願いは叶えられるだろうと思った。そして彼は祖父に、次のように語った。「すみませんが、お爺さん。私が訪れた目的は、お爺さんの居場所を突きとめて会いたかったからではありません。そうではなく私はお爺さんに師になってもらって、お爺さんのものすごい神霊術を教えてもらいたいのです。父が私に述べた忠告のように、お爺さんの神霊学および神霊力は並外れており、この世界では比べる者がいないとのことですよ！」

バタラ・ラマヤディは非常に優しい言葉で次のように答えた。「おい、我が孫、スンカラよ。お前が私を師にしたいと願うならば、すべてがお前を喜ばせることになるだろう。お前は父親の足跡に従いたいという願いを持っているからだ。しかしお前は、私の神霊術が完璧なものであり、この世界で私に勝る者がいないなどと思ってはならない。本当のところ、神霊術が完全であり、この世界で匹敵する者がいないのは神々の中でサン・ヒヤン・ウィスヌ(Sang Hyang Wisnu)だけである。彼は私自身の兄弟であり、まさに従兄弟にあたり、サン・ヒヤン・ジャガドナタの息子である。全世界で彼に並ぶことのできる者はいない。彼こそは戦士のチャンピオンであるプルソタマ(Purusotama)であり、すべての神々のチャンピオンであり、欲望から解放されていると言ってよく、あらゆるものを超越しており、全世界を支配することができる！」

ジャカ・スンカラは祖父の言葉を聞いて、非常に驚いた。祖父のものすごい神霊術

を上回る者がまだいたからである。そして彼は言った。「ねえ、お爺さん。お爺さんの神霊術はサン・ヒヤン・ウイスヌに劣ると言いましたね。そのことを聞いて、私は失望しました。それでお爺さんの心までを失望させたくないの、私はお爺さんを師にすることはしません。私はサン・ヒヤン・ウイスヌと面会するための忠告と許可をお願いします。彼はものすごい神霊術を身に付けた創造物としてすでに非常に有名です。彼を私は私の師にしたいのです！」

「おお、我が孫よ！」とウムプ・ラマヤディは答えた。「もしお前の決意が堅いならば、私はもちろんお前に同意し、祝福する。お前がいつも平安の中にいるように。何よりもお前に対する私の忠告は、用心をしる、ということだ。お前は彼の憐れみを請うのだ。ところでサン・ヒヤン・ウイスヌの居場所はジョングリンサラガ(Jonggringsalaga)の天界であり、トゥングル山の頂上にある。それはサン・ヒヤン・ジャガドナタの天界と一体になっている！」

祖父に敬意を表した後、ジャカ・スンカラはトゥングル山の頂上を目指して、天空へ飛び去った。天界に到着するとすぐに、彼は天界の装飾の美しさを見て、非常に心惹かれた。すると世界のあらゆる生き物によって神として崇められている高貴で思慮深いサン・ヒヤン・ウイスヌが天界から出てきた。彼の衣服は緑色であり、燃え上がる黄金で飾られていた。彼は太陽の光のように照り輝く光に包まれていた。彼はチャクラ(車輪)の武器を持っており、ジャカ・スンカラに近づいてきて、次のように語った。「おい、スンカラ。ウムプ・アンガジャリの子よ。どうしてお前は父親や祖父を師とすることに満足しないのだ。お前の父親や祖父はあらゆる神霊術には熟達している。お前はサン・ヒヤン・ウイスヌを師にすることを熱望している。お前は習慣作法および責任に従うことができるだろうか？」

ジャカ・スンカラは彼を歓迎する言葉を聞いて、ますます驚いた。サン・ヒヤン・ウイスヌは、たとえ話さなくとも彼が望んでいることを理解することができた。

ジャカ・スンカラはすぐに礼拝し、次のように語った。「主よ。私は願いを抱き、一生懸命旅をしてきました。この世界で誰も及ぶ者がいない、しかも完全な師を得ることを願ってきた私の望みが叶えられるならば、病や死を少しも恐れていません。私は反対に尋ねます。あなたは本当は誰なのですか。私はまだ何も語っていないのにどこであなは私が意図しているすべてのことがわかったのですか？」

「おい、若者スンカラよ。知るがよい。この私が、お前が探しているサン・ヒヤン・

ウイスヌだ！」とサン・ヒヤン・ウイスヌが答えた。

そのような答えを聞いて、ジャカ・スンカラは跪き、地に接吻して、次のように語った。「おお、至高の神よ。地上界に対する保護は素晴らしく良いものであり、完璧でもあります。またあらゆる生き物によって神として崇められております。実際のところ、この大胆にも対面している私は憐れみを請い、また、あなたを師とすることを認めていただけますように願います。それ以外にも、私は、私に命じられたことなら何でも一生懸命に行います！」

「おい、若者よ。もしそうならば、お前は、私の卓越しているあらゆる姿かたちを理解することができるように、私のすべての行為、行動、態度をまねてみるのだ。私はお前に指示や教えをあたえていなくとも、私の憐れみのゆえに、お前は私のすべての行為をまねすることができるだろう！」とサン・ヒヤン・ウイスヌは答えた。

「おお、サン・ヒヤン・ウイスヌよ。おお、サン・ヒヤン・ウイスヌよ。私は喜んであなたのすべての命令を行います！」とジャカ・スンカラは答えた。

その時、サン・ヒヤン・ウイスヌは瞑想し、五感を閉じ、精神を統一し、魂を取り出した。その結果、彼の人間としての姿かたちは消えた。その時、彼を見ることはできなかつた。一瞬のうちに、消えて地の中に入り、また一瞬のうちに、非常に高い天空に飛び去った。一瞬のうちに、北極に到達し、一瞬のうちに南極に到達した。また、一瞬のうちに、最西端の地の果てに到達し、一瞬のうちに、最東端の地の果てに到達した。その後、すぐにトゥングル山の山頂に再び戻った。ところでその時、ジャカ・スンカラはサン・ヒヤン・ウイスヌが行くところはどこへでも、いつも付いて行った。その後、サン・ヒヤン・ウイスヌは再び精神を統一し、再び人間としてのもとの姿かたちに戻った。彼はジャカ・スンカラの前に思慮深そうに座った。そして彼は語った。「おい、スンカラよ。お前は私の神霊力のレベルがわかったか？」

「おお、神霊術において完全なる神よ！」とジャカ・スンカラは答えた。「私はあなたの神霊力のレベルをはっきりと理解しました。私はあなたの行くところはどこへでも付いて行きましたが、殿下の神霊術が完璧であることを知って、いつも驚いていました。私は疑いません。非常に驚くべき出来事に会ったからです。私は、全く夢を見ている者のように感じています。私に言わせれば、あなたの神霊術は明らかにあなたに及ぶ者はありません。そういうわけで、私は、殿下の祝福と憐れみを受けることができるように、殿下の弟子になることを非常に強く願い求めます！」

「おい、スンカラよ！」とサン・ヒヤン・ウイスヌが答えた。「知るがよい。このインドの全地およびその周辺においては、私の父サン・ヒヤン・ジャガドナタを除いて、私の神秘術に匹敵できる者はいない。しかしお前の知っている神秘術は、完璧であるとか、この全世界に比べることでできる者はいないとは言えないのだ。完璧であると言える神秘術およびその威力は、完全であり、精神の解放について理解している人間によってのみ獲得することができる。すなわち自分自身の人生を理解している者だ。その者は純正な人間であり、礼拝されたり信仰されたりする、また、礼拝し、信仰する場所の意味を知っている者だ。そのことについての私の知るところでは、グスマナジ(Ngusmanaji)という名の私の友人でもある者の威力に匹敵できる者はまだいない。イスラエル国の完璧な僧侶王である。彼は我が師グスマナジド(Ngusmanajid)の子であり、聖なる行いや神聖であることにいつも忠実である思慮深い僧侶だ。そしてその者でも、アッラーの霊を自認する預言者イサにはかなわないのだ。ところで本当に完全であり、優れている者は、パゲラン・カン・スジャティ(Pangeran Kang Sajati、アッラー)のみであり、彼に匹敵できる者はいない」

サン・ヒヤン・ウイスヌの言葉を聞いているうちに、ジャカ・スンカラは力が衰え、彼と一体になったように見えた。サン・ヒヤン・ウイスヌの神霊術および威力について彼を凌ぐことのできる者がということ、スンカラは全く想像することができなかつた。その時、ジャカ・スンカラは次のように言った。「おお、サン・ヒヤン・ウイスヌよ、成長するあらゆるものによって神として崇められている者よ。この私の言葉が殿下の心をがっかりさせることはありませんように。もしそうであるならば、私は殿下の弟子にはなりません。殿下は、この全世界で並び立つ者がもはやいないほど、完全ではありません。私は、最高の神霊術およびその威力を持っている者以外の者を誰とも師とすることはしません。もしそのようなことが起これば(サン・ヒヤン・ウイスヌの神霊術を凌ぐ者が現れたならば)、私の心は失望するでしょう。「真実の神」(Pangeran Sajati)とも「全世界の支配者」(Murti ing jagad)とも呼ばれる者を私は師としたいと願います。それゆえ、主よ、もし気が重くなければ、どうか「真実の神」と呼ばれる者がどこにおられるのか、私に指示をあたえてくれますように。私はすぐに彼に対面したいと願います！」

サン・ヒヤン・ウイスヌは少し笑って、次のように答えた。「おい、スンカラよ、その神の名はグスティ・アッラーであることを知るがよい。彼は、空間と時間を超越し

ているのだ。彼が地と天とその中身を創造されたのだ。彼は生命と幸福をあたえた。彼はすべての創造物に地位や神霊術および威力をあたえた。その神は普通の人間のよ
うに姿かたちがない。ところでお前は「真実の神」の存在を知ることが強く願っている
ようだが、私の見方では、グスマナジという名の私の兄弟の僧侶を師とするだけで
充分だ。彼がお前の思考に光の道をあたえることができるように。さあ、若者よ、す
ぐに私の兄弟に会いに出かけるのだ。彼がお前に憐れみをかけてくれるように。私は
祝福の祈りを捧げる。お前がいつも平穏無事であるように！」

ジャカ・スンカラはサン・ヒヤン・ウィスヌが自分に命じたことは何でも実行した。
彼はすぐに跪き、イスラエルの子孫であるユダヤの国に向かって、天空に飛び去った。
イスラエル領内に到着するとすぐに、彼は僧侶グスマナジに直面した。彼は自分がナ
ジュランの王の孫であることを語った。それ以外に、彼は自分の遍歴を初めから終わ
りまで語った。簡単に言えば、ジャカ・スンカラは彼の弟子にしてもらいたかった。
手短かに話すと、ジャカ・スンカラは預言者イサの律法に基づいた宗教を奉じる僧侶グ
スマナジを師とすることになった。彼自身に、知を開放して、完全な死に至る術が教
えられた。それはすべてジャカ・スンカラの心を非常に幸福なものにした。そればかり
ではなく、彼自らは宗教学の教えの根本をいつも熱心に学んだ。彼は、神々が行っ
ているように、いつも信仰心を持って、最高神アッラーの律法を実践し、神霊術およ
び兵法から身を遠ざけた。ジャカ・スンカラが学んだことは、最初の目的から大きく
外れていた。そして僧侶王（グスマナジ）は彼に対して大いに憐れみをかけた。しば
らくするとジャカ・スンカラは預言者イサを友人にしたいという意志を持った。彼は
思慮深き僧侶に次のように語った。「おお、知恵に富む僧侶王さま。いつも最善を行い、
反逆の心から身を遠ざけている者よ。私は、私の気持ちさがさらに満足するように、預
言者イサの親友になるためのお許しをいただきたいのです！」

「おい、スンカラよ！」と僧侶は答えた。「私はお前に預言者イサの友人になる許し
はあたえない。お前は神を礼拝することにますます夢中になるだろう。お前の生涯は
非常に短くなるだろう。ところがお前の生涯の物語はまだ長いのだ。それは最高神ア
ッラーが定めた運命の意志なのだ。そしてお前はアッラーによって、インド領の南東
にあるダワ(Dawa) [ジャワ] 島に住むように定められるだろう。お前は私のすべての
忠告を行うことに、もはや疑いの気持ちを抱いてはならない。私はお前に起こるこ
とをすでに知っている。あとでまた、アッラーのいとし子となる預言者が現れるだろう。

彼は預言者たちの中で最後の預言者となる。この全世界で彼に及ぶことのできる者はいない。彼こそが預言者ムカマド(Nabi Mukhamad)[ムハンマド]⁽⁴⁰⁾だ。使徒はNuringratの光を帯びている。彼はメッカの地で生まれ、やがてお前は彼の友人となるだろう！」

「おお、叡智に富んだ僧侶王よ！」とジャカ・スンカラは尋ねた。「ところで預言者ムハムマドが誕生するまで、あとどれくらいかかるのでしょうか？」

「メッカでNuringrat(ムハンマド)が誕生するまで、あと500年かかるだろう！」と僧侶は答えた。「しかしお前は必ずや彼と会うことになるだろう。お前はルルマト(Lulmat)[北極]の地に至り、長生きをすることのできるティルタ・マルタ・カマンダル(Tirta-marta Kamandhalu、生命の水)を飲むように運命づけられているからだ」

「それならば、私は忠告を仰ぎたく思います。その場所はどこなのですか。私はすぐにそのティルタ・マルタ・カマンダルを探したいです。私は預言者ムハムマドの誕生を自分の目で確かめたいのです」とジャカ・スンカラは言った。

思慮深き僧侶は次のように言った。「おお、我が子、スンカラよ。私は神にもものすごく感謝する。聖なる宗教学を懸命に学んでいるお前を見ることができたからだ。しかしお前は知るがよい。今回はまだその時ではない。ところでお前は、インドの南東側のダワ(ジャワ)島に住んだならば、北極に到達するだろう。お前はまた知るがよい。やがて後日、武器を作っているお前の父、ウムプ・アンガジャリは受け入れられ、サン・ヒヤン・ジャガドナタの心を喜ばせることだろう。そして彼はインド領内のスラティ(Surati)国を賜ることになる。お前の父はプラブ・イワクサ(Prabu Iwaksa)という称号によって、そこで王位に就く。そういうわけだ、若者よ。私はすでにお前に十分な学びを授け、すでに述べたように、宗教学を実践することにも合格した。私の考えによるならば、お前はスラティ国で父親に従うほうがよい。間もなく、インド領において災厄の時代が到来するからだ。私が信仰している預言者イサの奇蹟により、彼は神と自認しているサン・ヒヤン・ジャガドナタを滅ぼそうと願っている。その時、インド領の神々はすべて逃げて、退避する。お前の父も一緒に逃げて、国を離れ、神々と行動を共にするだろう。お前の父親が退避した後、お前以外に、王である父の地位を受け継ぐにふさわしい者は他にはいないのだ。そういうわけで、お前はまず帰国し、王国で権力の座に就き、喜びを噛みしめた方がよい。お前に対する私の命令はこうだ。お前がインド領に住む場合、外面的な行為については、神々を崇めるインド人たちの

風俗、習慣に従うのだ。お前はそこの風俗・習慣に従わなければならない。けれども内面的な問題（信仰）においては、実在するグスティ・アッラーを崇拝することを忘れてはならない。アッラーは人間のあらゆる態度および行動を实によく知っているからだ！」

僧侶に恭しく礼拝した後、ジャカ・スンカラはすぐに出発した。彼はもはや天空を飛んで、神霊術を披露しようとは思わなかった。彼は村のアジャル（教師）や僧侶が旅をするように、地上を歩いた。旅の道中にあるジャカ・スンカラの話は語らない。スラティ国に到着すると、彼は父親に会った。ジャカ・スンカラは、父に、これまでに経験したすべての話を、初めから終わりまで語った。そして父親であるプラブ・イワサカは、それを聞いて、非常に幸せな気分になった。（つづく）

注

- (1) ペルシャ東部の地域（州）の古名称。
- (2) クルアーンに登場する預言者の1人サリーフであると推測される。
- (3) ヒンドゥー教で使用される太陰太陽暦。インドでは現在も使われている。
- (4) ジャイナ教の宇宙観における時間（時代）の5番目の段階。『パラマヨガ』ではジャワの神話時代に適用されており、サン・ヒヤン・マニックマヤが世界の王になって以降の時代をいう。
- (5) 『パラマヨガ』で用いられている暦。太陽暦と太陰暦がある。人類の祖アダムが指導者になった年をもって、紀元元年とする。
- (6) クルアーンに登場する預言者・使徒の1人。イサ（イエス）は大預言者の1人として、ムスリムから高い尊敬を受けている。彼はキリスト教徒と同様にムスリムにとっても救世主キリストであり、処女の母マリアから生まれる。
- (7) ヤコブ別名イスラエルの12人の息子（イスラエル12部族）の1人。
- (8) イサ（イエス）の母。クルアーンに登場する女性の代表例。女性預言者を認める説によれば、天使が神の言葉をもたらしたので、預言者とされる。
- (9) クルアーンに登場する預言者の1人。アブラハムの息子。アラブ人およびムハンマドの祖先。
- (10) イスラームの開祖。唯一神アッラーから選ばれた最後の預言者・使徒として布教を行い、クルアーンを伝えた。

（参考文献）

Florida, Nancy K. 1993. *Javanese Literature in Surakarta Manuscripts. Volume 1,*

- Introduction and Manuscripts of The Karaton Surakarta*. Southeast Asia Program (SEAP). Ithaca: New York: Cornell University.
- 2000. *Javanese Literature in Surakarta Manuscripts. Volume 2, Manuscripts of The Mangkunagaran Palace*. Southeast Asia Program (SEAP). Ithaca: New York: Cornell University.
- Kamajaya (Karkono Partokusumo). 1964. *Zaman Edan, Suatu studi tentang buku: Kalatida dari R.Ng. Ranggawarsita*. Jogjakarta: U.P. Indonesia.
- 1977. *Serat Paramayoga*. Yayasan “Mangadeg” Surakarta: Yayasan Centhini Yogyakarta.
- 1985. *Lima Karya Pujangga Ranggawarsita*. Jakarta: PN Balai Pustaka.
- 1993-1997. *Serat Pustakaraja Purwa, Jilid 1-4*, Yayasan “Mangadeg” Surakarta: Yayasan Centhini Yogyakarta.
- Mardiarsito, L. 1986. *Kamus Jawa Kuna-Indonesia*. Penerbit Nusa Indah: Flores.
- Otto Sukatno Cr. 2001. *Paramayoga ; Mitos Asal Usul Manusia Jawa*. Jogjakarta: Yayasan Bentang Budaya.
- Poerbatjaraka, Ng. and Tardjan Hadidjaja. 1952. *Kepustakaan Djawa*. Djakarta: Penerbit Djambatan.
- Prawiroatmodjo, S. 1981. *Bausastra Jawa-Indonesia (Jilid I & II)*. Gunung Agung: Jakarta.
- Simuh. 1988. *Mistik Islam Kejawaen Raden Ngabehi Ranggawarsita, Suatu Studi terhadap Serat Wirid Hidayat Jati*. Jakarta: Penerbit Universitas Indonesia.
- 青山亨. 1994. 「叙事詩、年代記、予言：古典ジャワ文学に見られる伝統的歴史観」『東南アジア研究』32(1):34—65.
- 豊田和規. 2003. 「『パラマヨガ』—宮廷詩人ロンゴワルシトの「ジャワ神統記」」『南方文化』30:193—210. 天理南方文化研究会.
- 2004. 「ロンゴワルシトの『パラマヨガ』に見られるジャワの神々の系譜」『南方文化』31:91—107.
- 2005. 「『プスタカ・ラジャ』に見られるジャワの王権の起源」『南方文化』32:49—67.
- 2006. 「宮廷詩人ロンゴワルシト研究序説—ロンゴワルシトの予言書」『南方文化』33:43—66.
- 2008. 「ジャワの宮廷詩人ロンゴワルシトの『スラット・チュンポレット』」『南方文化』35:79—99.
- 2017. 「ロンゴワルシトのジャワ神統記『パラマヨガ』(その1)」『東京外大東南アジア学』22:73—116. 東京外国語大学外国語学部東南アジア課程研究室.